

友人として

佐口和郎（東京大学教授）

ただいまご紹介にあずかりました佐口と申します。金澤さんが亡くなられたあと、その喪失感の大きさに自分でも驚いております。金澤さんの存在を、彼が凜として生きてくれていることを前提として暮らしてきたのだと痛感しています。今日はサークルの思い出、あるいは大学時代のことの一端をお話したいと思います。

英語でメンターという言葉がありますけれども、金澤さんは本当に私にとって唯一無二のメンター、自分を導いてくれる信頼できる人でした。なぜなら人生を決める2つのポイントで非常に強い影響を受けたからです。

私は1974年に大学に入学したのですが、そのころ社会のために何かしたいと考えてはいたのですけれども、何をやってよいのか分からず暗い日々を送っていました。そのときに友人に誘われて駒場寮の川崎セツルメントの部屋に入ったのです。すると、そこに金澤さんがいました。私はあのころとんがっていましたから、いろいろ挑発的な質問をしたのですけれども、彼は理路整然と、待ってましたとばかりに、生涯変わらなかったあの口調で答えてくるわけです。セツルメントというのは、地域実践系サークルで、社会的弱者のためにいろいろなことをするということだったのですが、私にとって印象が強かったのは、とにかく金澤さんが颯爽としているということでした。本当にこんな人がいるのだという思いでした。社会的弱者のための運動とか活動というのは、何となくおとなしく伏し目がちにやっているものだという先入観があったものですから、新鮮な驚きだったのです。

当時の駒場寮というところは、行ってみたことのある方は分ると思いますけれど、非常に汚

くて、よどんだ空気が漂っていたのですけども、彼のいるところだけ空気が澄んでいるように見えたのです。本当にそよ風が吹いているように思いました。ただ私もひねくれているもので、すぐには入部しなかったのです。あまりに確信を持って語られちゃったものですからそれに圧倒されつつも、本当なのだろうかというかすかな疑問と、あんなふうになってみたいという気持が交錯していたのです。結局、秋に入部したのですけれども、彼は「お前は来ると思っていたよ」と言ってくれました。金澤さんの颯爽とした姿が、私の人生の方向を決めてくれたと思っています。

2番目のポイントは大学院の入学のときです。私は元々は、例えば地方公務員といった形で、現場で働いてみたいと考えていたのですけど、ここでまた彼が登場したわけです。喫茶店で、実践も大事だけれどそれだけじゃだめだっということをとととと語ってくれるのです。そして「論文ってこう読むのだ」、「こうやって論理の再構成をすると面白い」、「その矛盾を突くことは本当に面白いことだ」ということも語ってくれました。私はセツルメントでやってきた方向性と研究というものが、どこかでつながっているような気がして、大学院への進学を選びました。考えてみれば、大学院進学後に労働問題のゼミに行けと勧めてくれたのも彼でした。セツルメントでは彼も私も青年部で、青年労働者と一緒にサークルを作って、読書会とかいろいろなことをやっておりました。自分はセツルメントの地域の側面で地方財政をやるから、お前は労働者の方をやれということだったんだなと思います。私はこうして研究者の道に飛び込むことになったのですが、そのときにも

院生としての金澤さんの颯爽とした姿が強く影響したことはいうまでもありません。

そしてその頃、彼が本当に努力の人だということを知りました。金澤さんは大学院の入試の助けにと自分が使ったノートを貸してくれたのです。彼は、一つ一つ、細かく単元を区切って勉強していたのですけれども、その単元ごとに、F、F、F、F、って記した跡がありました。一つ一つマスターするたびにFと書いていくのです。その几帳面さ、コツコツやっていく地道な努力に、私は驚きました。そのFはフィニッシュのFなのだと思いますけれども、もう史男のFなんじゃないかと。そういうふうに見えるぐらいイメージが重なったのです。よく彼から「お前は All or Nothing だからだめだ」、「スランプでも最低限できることがあるじゃないか」と忠告されたものです。金澤さんは地道に堅実に仕事を積み上げていく、そういうタイプの努力の人だったのです。葬儀の時、それから今回の偲ぶ会で皆さんのお話を聞いて、彼は頼られ過ぎるほど頼られてきた人だと改めて感じましたけれども、その陰には並外れた努力があったのだと思います。

しかし彼は実に不思議な人でもありました。皆さんよくご存知の通り、彼は「正論の金澤」と言われていました。しかも自分より上の人といえますか、教官とか、先輩に向かって強く言う、強い立場の人に意見をぶつけていく、そういうタイプの人であったわけです。また過激な発言の裏にあるエリート意識に対しては非常に批判的でしたし、やや斜に構えた発言に隠された消極性を見逃さない人だったのです。でもそういう「正論の金澤」なのですけれど、不思議なことに周囲から浮かないのです。普通なら不遜で鼻持ちならないやつとか生意気なやつとなるのですけれども、決してそういうことはないのです。セツルメントのような泥臭いところでも、大学院のように個性的過ぎる人たちが集まっているようなところでも彼は自然に人の輪に溶け込んでいる、不思議な存在でした。

これには、いろんな理由が考えられます。も

ちろん正論はまさに正論だったということではあるのですけれども、私には、彼が茶目っ気にあふれる、後輩の私が言う和不遜なのですけれども、本当にいい奴、そういう人だったからではないかと思われてならないのです。彼はジョークが好きで、皆さんもお付き合いがあったのでよく分かると思いますけれども、こちらがジョークを言うと必ずジョークで切り返してくる人でした。また、自分のジョークがどの程度受けているかっていうことをすごく確認したがるのです。ニコニコしながら、「はあ？」とか言いながらこちらを覗きこむんです。あれには時々困ったのですけれども。

われわれの少し上の世代では、自己否定という言葉がはやりました。でも彼はその真逆の自己肯定の、大らかな自己肯定の人だったのではないのでしょうか。少年時代の感性も含めて、人生で経験したこと一つ一つを大事にする人、今の自分の考えで簡単に過去の自分を捨てない、染まらない、そういうタイプの人だったと思います。

院生時代、彼はよく研究室でちょっと壊れかけのギターを弾いてフォークソングを歌っていました。アングラ系のフォークではなくて、大らかなカレッジフォークを、気持ちよさそうに歌っている姿が思いだされます。大らかな自己肯定、人柄の良さ、そういうものが金澤さんの正義感の裏側にあったんじゃないか、それをみんな感じていたのだと、私は考えています。

彼のように颯爽とした人になりたいと願い、追いかけてきましたけれども、実際には、「なかなかじゃない」という彼からのほめ言葉に、喜び甘えてきたような気がします。就職したあと、お互いに会うことはあまりなかったのですけれども、たまにばったり東大の近くとかで会うと、彼は必ず、今こういう研究をしているんだということを熱っぽく語ってくれました。私には、「俺は昔と変わっていないよ」、「お前もがんばれ」と言ってくれているように感じられました。彼の前に行くくと学生時代に戻ってしまって、とても懐かしい気持ちになって素直に

話を聞いている、そんなことが繰り返されてきたわけです。

最近、私も地域の雇用とか福祉について研究を重ねてきたので、これで金澤さんと学生時代の原点に戻って一緒に研究できるかもしれない

と楽しみにしていました。そうした矢先の不幸で本当に悔しいです。しかし、彼と青春を共有できたことを誇りに思っています。金澤さんの声を心で聞いて、これから生きていきたいと思えます。ありがとうございました。

長谷部勇一（横浜国立大学教授）

経済学部で長谷部です。金澤先生は1990年、平成2年に本学に着任しましたが、私自身は、その2年前に静岡大学に非常勤講師に呼ばれた際に会ったのが最初の出会いでした。経済統計と情報処理を教えに行ったわけですが、その慰労会に静岡大学の土居先生や浅利先生とともに金澤先生も出られて楽しく食事をしました。

その当時、消費税の導入論議が盛んで、その消費税を巡っては静岡大学の中で財政の金澤先生の他、経済政策、経済統計、そして租税法などの先生たちが集まり、消費税研究静岡グループを作っておられ、大阪大学の本間先生のグループや、当時の大蔵省を相手に論争をしていたちょうどそのときでした。何か新しい論点が提起される、あるいは何かマスコミから問い合わせがあると、夜の10時・11時でも非常招集がかかる。そうすると静大の先生たちみんな集まって、深夜、また研究を始めると、そういう非常にハードな仕事をしていたようでした。それらのことを金澤先生はなんか楽しそうに話すのです。大きな課題があったり仕事があったりするときに、それを逆に楽しみに変える。そういう不思議な能力を持っているのだと、これは非常に印象に残りました。

その後、国大に着任されまして、私と年齢がほぼ同じということもありまして、いろいろな話しをするようになりました。その2年後ですか、静岡大学で経済理論学会があった際に、当時金澤先生はまだ静岡から通っておられたということもあって、「うちに一晩泊まらないか」ということで泊まらせていただきました。奥さまの手料理をごちそうになったり、娘さんたちと一緒に市内見学を楽しんだり、そういう思い出もありまして、それ以降、金澤先生とは子どもも同じような年ごろということもあり、家族サービスをどのようにするのか、あるいは親子

の関係をどう考えるのか、そういうプライベートのこと、もちろん大学や学問のことも含めて、ほとんどすべて相談し合うような、そういう親友になりました。

ですから、もう20年以上お付き合いがありますので、ちょっと短時間ではその思いを伝えることが、多分できないと思います。特に今までのお話にありましたように学問研究、そして教育、あるいは大学行政とすべてにわたってエネルギーに走り抜けてきた金澤先生を身近に見て、そして私が率直に感じたこと、あるいは学ぶこととといいますか、それをお話したいと思います。それ以外にいろいろお話ししたいこともあるのですけれども、写真や資料をスライドにしてまとめてみました。それらをあとで見たいと思います。このスライドの撮影にあたっては金澤先生のお嬢さまの史津香さんにいろいろ手伝っていただきました。そしてこのあと予定されています「献杯の集い」でも家族の思い出を中心としたスライドを用意しております。写真を通じてですが、いろいろ思い出をふり返っていただくためにも、是非見ていただきたいと思います。

私自身の思い出ということで3つあります。1つは学生に対する非常に熱意ある対応です。これはご葬儀の際、金澤先生のお父さまが「やはり教師たる者、児童・生徒・学生、これがまず第一だ。」というお話を聞いて、なるほどなあと思いました。とにかく学生、特にゼミ生に対する指導、これはもう非常に厳しく熱心でした。通常は卒業論文だけですけれども、金澤ゼミは3年ゼミ論というのが必修でした。合宿も3泊4日、4泊5日で、必ず日本全国の特徴ある地域を選んで、びっしりと予定を組んで、それで調査に行き、3年生はそれを基にゼミ論を書くというような、そういう指導をしていました。さらにその3年ゼミ論、そして4年生の卒

論、そして大学院の修士論文、場合によっては博士論文なども含めて、暮れに一度原稿を出させる。12月31日が厳しい締め切りだということで、今日お見えになった学生・OBの皆さまも経験あるかもしれませんが、金澤家の12月31日大みそかは、結構、夜遅くにも玄関がコンコンとなる。郵便では間に合わないので、静岡や大船の家までも行ったという、そういうエピソードも聞かされていました。

また、ゼミ論や卒論の発表会のときに金澤先生は必ず他の先生を呼ぶわけです。10分・15分ですけれども報告会に参加し、その卒論にコメントをすることになります。これは自分が指導した学生の発表をほかの先生に聞かせるわけですから、かなり勇気のいることであり、自信がなければできないところです。それをずっとやり続けてきました。そして、そこにまた気配りがあるといいますか、10分・15分の参加でも必ず夜の慰労会には呼んでくれまして、そこで学生の中に入っているいろんな話しをする。そうすると自分のゼミじゃない学生と仲良くなるというようなこともありました。このようなゼミのやり方は私も3年ゼミ論をそのあとやるようになるほど、かなり影響を受けました。

2つ目の点、これは上川先生もおっしゃいましたけれども、大学院のドクター養成スピリットという点です。これは重なりますので簡単に済ませたいと思いますけれども、とにかく大学というのは教員だけが研究するのではなくて、大学院生が層となっている、これが大事だと。そして博士論文を指導するようになると、指導するために教員も先進的な研究をして、それに基づいた教育をすることになる。これが重要なのだということを非常に熱心に説かれていました。最初はドクター、大変だろうなと思いましたけれども、やはりだんだんそういう説明に納得させられるといいますか、なんか宗教的に言えば釈伏されるような、そういうふうに自然に共鳴して私たちも受け入れたということです。それから3番目は、私も皆さんと同じように組織者として魅力を感じます。大学の中で、特に

法人化前後からいろんな書類書きが増えて、特に大きな課題プロジェクトの申請書の作成の時が大変なのですけれど、そういう時は、必ず人を呼ぶのです。特に私は研究室が隣りということもありまして、トントン「長谷部さん」と来られますので、何となく断れないのです。嫌々ながら書類書きを手伝っている。そうすると、いつの間にかそれが苦にならなくなる。最終的には自分もそれが楽しくなって、一緒にプロジェクトにかかわってしまうというようなことが多くありました。先ほどお話にもあった地域実践教育研究センターの活動もそうですし、佐土原先生がやっておられる神奈川拡大流域圏の研究、これもいつの間にか引っ張り込まれた。そのうち私も面白くなったとこういうような経験を持っております。

このような魅力といいますか、そういうものがあって、例えば学会であるとか、あるいは地域であるとか、あるいは行政であるとか、金澤先生を中心に人の輪が形成されてきたのだと思います。その核となってきた金澤先生を失ったのはほんとに残念なことですが、そのネットワークの繋がりを引き継いで発展させていきたいと思います。

最後に金澤先生とお話した中で、最も印象に残ることをお伝えしたいと思います。

実は2年前にお互いの同僚であった経営学部の大塚先生、そして一橋大学に転任された加納先生を相次いで亡くしました。私も大変ショックだったのですが、その頃に金澤先生とは、よく生と死に関していろいろ話しをするようになりました。その後何回か折に触れて次のような言葉を聞くようになりました。「ぼくは今現在、後悔してない。今まで全力を尽くして十分いろいろやってきた」と。本当に、いろいろな事に一生懸命に取り組んで駆け抜けてきた、そういう達成感を感じていたんだと思います。もちろん、まだまだ金澤先生はこれから活躍できる分野がたくさんあったと思いますが、少なくとも現在において悔いはなし、ということだと思います。ご静聴ありがとうございました。